玉勝小櫛

九

源氏物語玉乃をぐし九の巻

宇治

はし姫巻

ふる宮おはしけり　二のひら　惟喬親王に准據して書るなるべし。冷泉院の御時になりて世をうしとおぼしなりけるなり。文

宇治にすみ給ふも。かの親王は小野の山里にこもり給ひしに

准へたるなるべし。薫君のかよひ給へるは。業平朝臣のおも

むきなり。菟道稚郎子の御ことをもおもひよすべし。

くだりたるにて　三のひら　紫のまへをもぐしりぬくさまに宮子にて

おはしませば。かぎりありて。ただ人のむすめになりぬる也。　細流に。

天子に對へて解ゆるはゆるがつり。かれ説のごとくは上へ限あるし。こゝもそ
然らば下へ限りなくて。ただ人とはこゝ有るよしにこそ可也。
いてたしくやむことなきこゝ　四のひら　姫君のまし。中君といふは知がことし。
又がれ時　九のひら　或ものに。此威勢の時しといつるごとく。この時は時にあふ。
時をうしなふなどいふ時し。
中ねの君は中くこゝ　十二のひら　院のれうぜは。姫君ならば御ゆりしくおぼ
し。是をに。年ゆり紀蓋君ハ。かつりてさはあらで。父家をゆりしくお
ぼせるといふし。細流。中くれあてどころしゆがつり。
たかぐしきくもつらでるぬべかるを　十四のひら　をハ。色を保せるなるべし。
さまがに抱むつりしくなどのをつるは　十六のひら　上のその人ならぬこゝの掌し。

学れしゆゑしにきく出べかめるを　十九のひら　きくハ。知きの保なるべし。
をしへらせ給ひ　古れ知ら　此君のゐ人が蓋君ハ。かくみちびきよせ
なりしハ。上文ゆ。此年はひかれかたちれ。さるなれ〳〵しきこゝちに
もいと是でしくがくじけなしおぼ母もバこゝとつるぶらく。さるな
れなれしきんにも。人の君のこゝ紀とがくちれ是でしれとに。おのづから
感じてやむことえぬんのつるハ。おのづかられ人の情にて。こゝ抱乃あ
はれ感しるし。さるハ紫式部も。そこをほ是て。さるなれ〳〵しきこゝ
ちにもとはいつるし。然るに乗花細流に。そのゐ人のん。然るべからば不知も
とつるハ。抱語をいたゆる經書などのごとく思ひなつるにや。俗のかゝらぬ
にへつらひしる。つぢきなき編し。

扇をすてこ通しても月ハ手繰きつべかりけり　古の詞　河海に水源に月を掌
ぶと以ふ説ありと云也。此説結るべし。ま繰びを後にま繰きとハ改めつる
時るべし。さるハ次に入日後へ出ぬとなりて。まゐきに出ゆくりなく思ひとりて。さかしらに改めつる時也。扇を以
て月を招けるす。なるすも何も。よし時きことなれバ。中々に知がてこそ。その
うへ月は行かしさし出るとなるにも。ま繰ぶ
れかの撃テ扇ヲ喩フ之ヲといふ事。よくかなへり。下にこれも月にも時なく
ものうそといつるも。まゐぶにてこそよくかなへれ。さて入日後へ出て云
とハ。とぐ撥(バチ)りつきていつる時也バ。ま繰ぶといふに妨なし。
まゐぶ結ぶおぼくれ　古の詞　萬葉一夜に。いまぐいひも出ぬに。たや源に出

るとしといつるよろし。たやくとのこゝにてハ此詞のこゝにさがり。
弁が母りなん侍る　古の詞　此詞に頃ぞ。其名を。こゝハ始めて書給へ取
とし結ぶて。いまぐ名のりハをぶれば。薫忌を。弁といふ名を。いまぐ知り
あふまじきに。ゆくりかにかく。弁がとハ中に見べきにあらず。
今さしかへ取云々　古の詞　紐二句ハ薫のすゝいつりといふ説を。かつるといふ詞
りなづ名を出て。知がことし。かつるといふに。こゝハなし。
かくてやしうよづかぬ云々　古の詞　姫忌たちはすを八宮のおぼせるに。
よづかぬとハ琴(コト)を知き結へと。しるびくのかへども。笑入(レ)ぞして。知らせら
まゐひあふすゝさしてのかへ取つるし。思ひやりハ人の思ふとかつし。思ひの外
なるハ八宮のおぼし。其後に此のやうにもなりぬし。たゞかくしハ薫忌のおぼ

さんどころをなり。

おまへまてうしおきせまへ　四十一のひら　蓋ゑのはまへまてうしうひまへと。弁が今ゆれ語し。ゑまゐといふより。柏木ゑのいひまひし詞し。

かのはゑのゆうつきしより　四十二のひら　こはは柏木ゑのみづから書けまつる封ゆへ行らばして。弁が。柏木ゑのはゑをうきてつましる封なるべし。其故は。此中ふかれ君のいまへのゆゑになりてのみあり。それは女三ゑのは絆ふてそなべ也。柏木ゑの絆ふ。そじめて。みげから此袋ゆ入はおるべきよしなし。されば加の女は。弁がうをとり給ひ。小侍従ゆ入はとさで。とゞ見おきしるか。たゞ女三ゑよりこひかへして。此袋ゆへ入おきしるか。そは以づ也ふまゐ。柏木ゑ此みげから此封ゆへあるまじきし。

さゑぐしかすしきるすを　同　をは。ゑをうやまれるなるべし。

今令ひらバ云々　四十三のひら　二の句。或抄ふ。よそ給ひしも見んもよをとし。

といふよろし。そはしもといふは。よそ給ひしものをとし。

椎が本光

まいて此方やうれ　四のひら　此まいてといふ詞。心得がたし。

いといとかしく　九のひら　見なる人もいといとかしうおしたりし。

一とろ〳〵　常ふ住つきぬ　同　むとりく〳〵といふと同じおとして。婦ゑ中ゑ。いづ也ふまれ。一とろといふことし。閑月本ふ。一とろとのまつる也。雅言成志らぬ人の。さかしらふたぶきまてしるし。

さるべきふやおもしきん　十のひら　上へつきしる語し。下へかくるは心がとし。

昇進をかくいはむこと、いとも、ふつかけしからぬ。
久しう祈りふけるを　日　此下に、ともじ落ちる祈るべし。
猶ゆきとるふ云々　日　みやこにはまだへとゝぬ秋を、ゆゑ事とるに。
とうゐる語し。猶ハ、おりしうゐへりとも。
山のはちかきまちまるに　十一の記　指きに、此山のはを、東の山といつるハ、
さし出てといふを、心得とがへるゐがことし。此物語、月の出るといつるは、
東の山より出るにハかぎらぬ。雲にかくれ、ほどしるが、殿ハすをも、又
月のくもて、光の見てそむるをも、出ッといつり、ゐるハ雲に隠れるが、殿ハ也
とるゆて、山のはく、西の山のはし。下に入る時月ハとゞまるゆてもあるべし。
ならしそ見つる　十三の記　姫君とあるを、蓋ゐに別しそめつるし。

むかしばかりにても　廿六の記　しゆひ、あらへの法にぞしにはゞ所にて、とぐ
昔時ハ家への法にぞしは、なごりばかり祈るにても、といふことし。
心がそくかなしきまとを　廿一の記　をハ、色の誤なるべし。
絶給らむが心がそきになん　廿二の記　きハ、さは誤なるべし。
あきとなりしてゐる　日　下句ハ、中君にひかをまふし。君ハいかゞ見給ふぞ。
古家乃終りにおハせし所と思へば、おの山の雪も、今年ハ家ハ、所ハ也と
てそ見給也乃ことゝ祈るべし。
あおく山乃云々　日　あはれ次の詞にてあるべし。　ほに、作志のみづから
の家に入りとの論、ようおきことし。
心らりかゝるこゝ思ひあへもぞ　廿四の記　思ひあふもぞ祈るべし。

何るすかもいるかしるがほてえ　同　こゝより心ながきゝゐめしかなるやう
もいるといふまで。とべて女のいるやうに心もちひをいつるし。ほども。
程多し。次にかいふぞし。
おわらぎをしる　同　大やうなるし。よりしぬ人のことしといるハいえじきゝゐがひ
なり。こゝハ大やうなるを。よきことにいつるにてそいふ也。
とてしんにとがふふしいるかもえ　同　男の心のいるがふなぞをて。心りしゐ
がふふしいる時も。よしやいかゞハせんえゝと。思ひなして。堪思してすぐせ
ぞ。心もきゝめしかなりて。末もくゝ契りとえぬるすもをとし。中くとハ。
男もわざなるかよりて。かつりて女の心もきとめしかなるよしし。つも
みな女の大やうなる後。よりしいつる語し。

ちがもそ先てをえ　同　こゝより上件の裏(ウラ)にて。女の大やうならざ
ゐが。いしきよりしいつるし。しづもそ先てハとハ。いさゝか心はかなゐる
をとて。男ハうしえて。そむくるすをれバといふを。川岸の岩もそむ家
かことへていつるし。かごる名をもえゝとハ。嫉妬ふかく。心みじか紀名のしろ
すを。ことへしるし。　此ゝより。ほどもいうしき語し。
名称なきやうなることなどもえ　此ゝのひら　女の男を恨をそむくから。契り
のなごりなくしゐるやうなるすもをとし。
みなうちまじ後先も　同　此下かどもじ落るなるべし。上にこそとい
をでハ。先れとハいひがたはしバし。さて此語のことハ。其中ハ男女のなか
らひ乃中にを。さやうなるすも。まじつまて。つゐに皆よくいるすぞと。

人のねたみをし給ふべからざること 曰 上件のごとく。女のたしなみがたく。嫉妬に
かくれなきにて。怒りやすきものなれども。常に身をつゝしみ。白家にて。そのおこりやすき
をたんずるにあはひて。そむくこと多くあれど。ふかくつゝしめば。然ならずして絶えずや
うなることはなしとし。おやしなど夫をうらみをかくいふべき事。志給ハ
ずとんをいとひて。のろひなどはやめて。中々へうつして。そむくことなき
くれぐれもの種はうらしきをむごとし。おもしろきものとは。いにおもしろきふり。
足がけみだりなることハ 曰 下にこのハ行出て。おそれありべし。善悪乃。婦女
にかへりて。すゝきづを給ふこと行ふども。そのみだりなることはやめてハすれてお
ずしとかまへてもおきて。中々なるを。新ふなれて。返答ゆきんと
おぼせとし。 ほどなく。上件は善悪乃語を。下には。家が婦女へのしるしを

のろひつること行ふことはみだりなることはとある須ふならずとあれ
ども。然りハわるくば。上件の語はいはゞ白家のなすのごとし。
はらづくずしおもしなふべきこと 廿六のり 足がかく中にも。中家のはずに
してこれもみだりなることにて。嘆おもひなふべきにあらじとし。
新たへ夫婦あるしとこと 廿七のり あるしはあるべきを守り。後見るなるべし。
あるまてハ思がくし。また新たへ夫婦とハ。心の井はうらみて。おそれハ
濃きすにつふきこハあり濃色心の家は。下女のことにて。濃くなりて
ふいてあく思ひ。さて新たへ夫婦あるべきとハ。濃くなれば思ひあふ白家のこ
とふし給ふ善悪のあるべし。濃くハ行ふじとハこゝろ加の家は行ふて
いあるにて。家を濃くなれば人のうばりつゝて。あるべきし。なすんとし。

○女訓とうし 九　○七

もむけて、中給ひで、ゆるしと志のふべきやうに婦人のおぼすめるといふし。
給る説、おもむけてを婦人へきて解まるるハよがつり。
もてたる相也給ひざるなんと　十四のひら　ざら相んハ、親ふ詞にて、もてた
相也ぞ。夫婦のかたらひもし給へかし。と思ふべけれだし。注よがつり。
おそろしさも相ぐさまして　十四のひら　夜も明るなし。心もとをのふしと
いつるハ、しるがへり。
あ山里給えく　十五のひら　とり何つ見といふに、鶏をこめたり。とり何
法見とるハ、あり也相ることなし。
何らとめ給ひつらむ　十九のひら　此下に、とおぼせだ。相どいふ詞の落る相らん。
本此まて出てハ、文そのいぞ。

長月も志げん相くて　同　此詞、九月になりて給るのおとく申されども。
下に、まぐ京ハひ異き深ど相也バとも何也バ、猶八月の内し、猶也だ長
月をまとんも志づんなくてといふきにや。かしいかぐに申也。
おとに出てハいかでかハえく　十六のひら　えにいでく。おかくといたむりハ、給らバと。
薫る心のうをしかぬをおとりし。されだ、えにいでく。さとハいたびして、中る心を
何をせん。給せバ、薫る心の中る心に思ひうつるべしと思ひかまへなふし。　細流
の説を、いうしきとがひし。まちとる人のあるんとうるをバ、見なかはしまや。
さるべき人のおたをぞ　十六のひら　ともかくも何つかひなふ父母姉おたをぬよ
になりて、といふことし。注、おたをぞといふにかはれど。似合とる人おハせ
ぞしてといたんハ、俗をこし。

いふまじきわざぞと　六十六乃ひら　婦人の。容貌がしおかしき也。
又ぶんも是かはりなく　六十七のひら　こよひかく業平ぬ。ちかづき給ふべきかは
のこゝろをかけて是かはりなき故ふかくゆきバ也。侍従むがごとし。
例のおかしくいふく　六十八のひら　さればふ婦人もぞひぶし、給ひし時のごとく
く例の実なりハなくて。我を明し給ふよし也。注むがごとし。
何かこれをいふく　日　何かハ。上の詞をとが見て。何かハ。外のかたにハ何かに。これハいふく
の為也といふなし。何かぞといふ注ハ。きこゆるがり。
何ぶん人かは詰いふし　六十九のひら　実かハなかりし夜ふいふやうふも笑ゆ。
まじがうしおそしおき。七十のひら　おそしハ。おかしを誤まるに。さてこハ花鳥
の説よろし。古来の説を捨まされんふも誰々かちまバ。まてがく記抱ふ。

おかしき事なるよし也。花鳥の外の注いふしきむがごとし。
いふしつるなりぞ　七十一のひら　これも家がよへあつるなれ。家ながらおかしき也。
かく同じえ候ふく　日　かく詰るに。湖月師説の方。よろしく覚ゆ。
かぞかわ詰なる中を　七十二のひら　かぞかわ詰まで。んへくまる詞なりて。筆をバ思ひ
まてむく。からバかり深く思ふんかり。といふ事也。
もくやごとなりふてハいふく　七十三のひら　けふのほども。婦人とく中納言にかひ
どまぎらかりし。これハ業平の。婦人のおかしきでくるしふ今よりハ。中納言より
思ひかつるべし。然れども。婦人へ今一云やうもありしき由とゆるもやまれど。
もくやごとなりまでハいえやむまじきれバ。まづ婦人に対面して。やれ
べきなり。一云やうて。さて中納言の此方へも抱まべきやどふ。中納言の此方

へ。今志バし待て。みちびき給ふまじくやとかくらひ申ふし。

いかがりなるとかハ云々　廿八のひら　とのゝ上ふ。こと乃二字為なるべし。さて又

おしたかり給ハんを。おしハかりなしん。などをべき語也。こゝハ世の人の。

おしたる事も多べく。又婦人のみづからおしたり事も多べし。いづれ

ふてゝ。給ハんといふ詞を。かなハぬ。注ふ。白文も何とかゝといふハ。記がてし。

おろかなりぬ云々　四十九ひら　薫の詞ふて。白文乃たるか解るそ。後へ云々。宇治へ

おたせしまゝ。おろかなりぬ。はなしのはんざしよと。ゝ四ハぶ也と云へるし。

注とがり。薫ゝ人の。白文へのんざしをさてハ。はこゝろざしといふ。はの字ふかなハぬ。

白文の宇治へおいをしまゝ。文づかへとハ。ゝ四ハぶ也とる詞なれども。

おひつぎかき給ひて　四十五のひら　きもじ。渇るべし。追繼也。先のくだりを追て。

日じさ事ふ。つゞきてかくゝ給いつるし。

あはよおろ也云々　日　上句ハ。婦人ふも申君ふも。実事ハなかりしかバ。

実ふ逢とりとハいふ給ひしとも。下句ハ。結ひども二所とも。ふそひぬ

しハ志給ひしこと。ハ。かでとばかりハ。かくまじ記ふもいふ。注。あの

詞なり。なきこと。

人志ぬ。ごとづらハしきみやづかへ　四十六乃ひら　宇治への媒志るべのなり。さて

その志しふを。かつて中文などの勘当をかゝぶり侍らんかとし。

かゝれいろゝ事がひ侍りつる　日　日でろへてくかくといふより。こゝまでハ。白文

の。宇治のなり。深くおぼさかいかゞと。はんを引見んと思ふ。おとさらふ

法くりての給へる語也。実なりかくおぼさるふを。いふ。

おなじ法さまがまにてそハ　四十七のひら　しゆらひ今乗宇治へおなをぎそそも。
もせよりさまがまのふことおもはバ。同じ法さまがまおもはバ。おりしませといふし。
俗の読り。一すきら漸くも。二すきらるも。同じことといふんだへなり。
注ハ。いとしき心がことし。俗の勢にそもしるべし。
心がくしきくもておもしおもふを　四十九の心　をハ。例のとを保まるし。
いつきさまるとらむ姫君もうし　五十の心　其中にやむことおきあの姫君乃。
うばりおくもてなやされ。いつきさまるとらむも。こまふさのこまさ
家をつくらじ。こまかどのすおるべしとし。思ひなしおもしかさまのうくと
ハ。さやうにいつき居る姫君ハ。こおくより此思ひなしにて。いつくしく思
なるしぞといふし。　細流などにこまれ女一家の法すとして説なつるを。

まが方さまといふを。白家の家とんはらまてるよりの保し。まが方さまとハ。
うれ姫君をみるへのこおくのといふことにてそつまを。又姫家を姫君とハいへ
家ことなきをや。
家雅をじ此うし　五十二此ひら　二の句。まがといつるハ白家ハしるしじとハのこ
まへども。いかゞつらん。しらまぬことおるを。家ハそまを粗こにさること。おるべし。
取りしつきてハいとおとにうし　五十四のひら　取につきてハといつること。ハ家
のやむことおき取りくらべくハ。此宇治家ハよろげさびしき取なれバ。
いりにかしづきなるそも。限をて。いとおとにおどいふぞかりにハえあ
ら稼ぞも。此取のさまにつりせてハいとことにかしづきなれるをいふし。
抱思ひくちふるおどまぐし　五十五のひら　しるし。一本にまぐしとも。おしみあらば。

和らり給ひもむんまうきをかえく　五十八乃ひら　三条之へ見えまし給ふまう
事ふかゝ申て志おかせ給つるを。まづ宇治へなり給ふし。　注とがつり。
ゆかしげ給ひ是ど　五十九のひら　蕙忌の。悪皆何るじ給ごとくに。蕙をさぐし
あふを。ゆかしぎなきすとおぼさし。かれはといふ。ハこれしき柄のかつはし。
あ　樗こそ云く　六十二のひら　樗ハ。葉ばよく和紫する柄なるによりていふし。
其ハ花。秋ハ和紫して。さくらこそし。
あ　いづこよりこそ　同　指出ニ。八宮の秋からも給へ。ふよせしるよしいふよろし。
さていづくにか給どハいたぎしていづこよりといふハ。此和紫のうぎハかく
だかりしさうは続だ。八宮も。こくよりハ。え立て行給ふまじきに。いづこより立て
ゆき給ひしことぞのこと也。

あ　えし人もこそ　同　岩垣とハ。岩のおのづから垣のぬく。もちあぐれる
をいふ。石を垣のやうにつとしるしと。ゆるハ。とがつり。
えおとりする法心をこそ　六十三のひら　白文の法心のこと也。　注とがつり。
かれはかの中納言もこそ　同　中忌へ。白文の法心の儀きハ。中忌のかたち
心だへなどのよくもあらぬ。なるやなど。蕙忌も思ひやし給りんと。そづかし
く。婦忌のおぼさし。
とりかへさ抱なら孫ぐをこがましう　六十六のひら　なら孫ぐ。此下。もしハを
こがましう。此下に。詞落しる給るべし。
うら給くものゆとこそ　六十八のひら　伊勢抱侍の心を。妹をいとりて。うつ
くしこふいつるしとハ。俗のかゝ婦をにいくしへつゝ知る。志ひごとし。

花のうつろひやすきは　六十九の歌　きは。ぞ。の結也。

歌 ながむるは云々　七十七の歌　ながむるところハ。京も宇治も同じ空なれど。

へだてハなき故。時過されども。その雲ゐて同じ空をもへだつる也。

何とて同じ空をへだてゝおもひつらむなどとおもふ心ぞかし。

あまし法を見きる　八十二の歌　或物に。此の家のみぞ見えもなきと也。

いづるともおもはくむをぞ結ぶとぞ　八十七の歌　この住みなれてあるべし。

歌 きしかたを云々　九十三の歌　結ぶがごとし。結句ハ上文に引きかへて　さきこ

とを数多くおもふもよし。とけるを見て見るべし。此れ等むすびのさかむ

家にて。何事よりこれらを見よ志むるなり。白玉の数ぞ結ぶをいへり。

中々いぶせく　同　かく人づてならで。言葉よみかはさばかり近くなひ見

なげゝわびぬる事。中々といへる也。

歌 行末を云々　同　結ぶもおぼし。

まつていかにと云々　同　細流のおもむき。湖月師説ハ。つらんといふ事なれど。

はしきいかゞ　九十七の歌　かくなる説のごとし。

二條院の御事乃對なり　九十五の歌　一本に。六條院のとあり。今案ずるに。次の

詞に。京へうつり給へる事を。まさしく二條院なれども。これは次の文を

もて見れば。ともに六条院にもあるべきか。其れは。暗くもまぎひあふべくと

いふこと。二条院にてハあらざりし。二条院ハ。白玉のつまの宮あれば也。又女一

宮の住方に云々も。二条院にてハ。さハおぼえまじきことゝ也。但しこれらし

六條院ならば。次の詞に。中宮ハ。六條院へとのたまひしかども。あるく

のたまひし。二条院に渡しまゐらせて。そのよし御いふべき事なるをもいはで。
二条院より渡りのふよし聞えは猶いぶかし。

玉鬘巻

あかずにおぼえて　二のひら　つみをさへまれぬは年ごろなげきけるおとゞをさ
されぬよしも。時をさへまれぬべくかける恒はいぶかり。
のことわりなきに　三のひら　人にのこしていはぬこともかりぎぬおぼして。を説り
おもひ身ふし。
いとせ給ひけん　六のひら　播磨に。花鳥に。いとせ給ふ處と志るし
る古き事とのまへる事。考へもとしまつる事にいひて。若紫八乃
をきて。いふべき事を。家を志まるといふ事を引て　その事にて

かゞまるよし御いひ。又一本にいとをしき處と古るよしにやあらむ。六帖なる哥
そのかみ給ふ事を引て。いとあしくふりたまへるよし。いへども。いづれか給ふ事
もてなしはかなき事ぞ。たゞ別にかたまへる事をべし。花鳥に志るしとかまひける
事なし。そのまへるがごとし。又かの玉鬘八の事は。ちでふ河海に。奥入
伊行釋ことに。志しくはその事とおもふべからず引きて。按之此両首。猶今
のんに不叶なりといひければ。考へもつきたるにまさりけり。
なほどをさへ給ふと　十のひら　河海に引きたる今ぞあるは。すなはちたるは
ぞ。引きたるかやにあるべし。これは御ちょうではてのことに志ひてはいひがる
にきこゆるにいへど。此里をさへれども思ふんは。ふるく給ふぞ。ちか
くのまちにつきてハ又られしくもありて。さるべく思ひみだれ給

家とのくるゝ事ふし。蓋の殿と近き所へうつり給ふんハ。くるのもしく。うれ
しきうことを行るよし。みぐ事ハ給てとハいろくと思ひまで。思ひまぐ先
ぬよし。 注ぞと。こゝさぐう給らぞ。
一 尺る人もえく 土のひら 尺る人ハ。中君みづから給すし。二の句。花の風に
みぐるゝによせて。こゝづからんのさるぞまゝひまふよし。尺る人も行るま
じといひかをしるにてあらぬ。
一 神事也しえく 日 おのがをしへ子長谷川常雄がいたく。此言ハ蓋の思
ふんを。きりぬまゝによめるにて行らぬ。中君の婦君ぬすゝ御おぼし。又
宮治の里を別也んこと御こゝ給うくおぼせるを。服ぐさ先んとめ
によるれしるし。さて神事しハ婦君。梅ハ中君をとゝへしるにて。婦君

の大切におぼせし。法兄弟ぬ中ノ君といふこと。二三の句ハ婦君ハかゝ事給
ひしかども。中君ハ。きしにかゝらぬ。しかひらかにておたしまゝよしなり。
四の句ハ。此度家にうつり給ふすし。二三の句より四の句へ引つゞきてんは
ぞし。結句ハうつり給ふん家のやども。何かハ此里に志と給ることゝ行ると
いつるにて。やはやはぬこと。一ぬ此言ハ婦君の大切に志すし中君
の。きしにかゝらぬ法さ家にて。うつりと給ふすれど。家ぬ所ども。此宮治の里
に異給ることやはて行る。しらぐ同じことゝおぼせし。服ぐさ先んをつるなり。
次の詞より。又も猶かやうにてなんえしといつるも。こゝ事にて。しく又へぬ
後をのこひかくしてといつるも。あかり給しきんをバかくしていたぞ。しらぐ
中君の心を。服ぐさ先んとるよし。といつるよろし。こゝ事にて。やどや

おもしろきといへる事、所々あり。
かくのもかへしきる所　十二の段　下文にさだまりてしあれバ、ひとひの後なる
ふりまるにこそありけれ。此字をもちてしるされきや。
かの岸よりいへる也とハいへども云々　十三の段　湖月の本の方ハ、まさしかるべし。
云 身所なきん云々　同　このハ舟への心あるにハあらで、ただ舟がなおれ所をいへる
おもひし別にむかしのごとくよき所つるなり。
云 あれしより云々　十四の段　三の句はしはらんやハの言也。古今集の、おもふ
ことこふるもいかにもあらむやと云なごし同様の事なれやし。
云 あがよれバ云々　十五の段　わの月も云々あれバ、舟も今山里所にて
少字なし、此末にかあらん。京にもむかしむかしくて文山里にかかつるやう

おもあかりんと、いやふくおぼせるし。次の所とてよく申しけり。然れども、
云かれきくを好む。
云々かりけて云々　同　白氏に近へてまて、今ハかく京に留れども、此後に又捨ら
まて、家弟に云々かりけて又宮に入りてやいかん、末つひにいかならんと、云々
飯まる所のべらる語也。
云 あまてるや云々　十七の段　河海抄万葉の引歌、ありがたきなるよし。指出に
やるがよし。ありきるべし。但しあまてるやの説ハ、指出もありがたし
まてあまてるやにあるのこづらひと、いひきいふことハ、例もなきもなき
ことなるを、これハ紫式部、にほてるといふことを思ひよするなるべし。
おほへの楷も露へぞて云々　十九の段　楷を露のへぶる所、いかにつき

ても。宇治のうすを思ひいでゝ。主し其のべぐ里ゆくこちして。何かまと
解ることおわく侍る。とのゝ事ふし。上に。第かりしるこちをといひ。下に。
がふおもせましかば。といつるなどをもて志るべし。侍臣いうしき事がてとし。
里がし事先ハをこがましきこと　十のひら　薫忌と申忌と。何まり志るしくし
給りんハ。人の思りんそしろも。あるさんなハ。をこがましくやがらんと思へども。
とのゝ事ふし。侍臣とがり。薫忌をうるがひなふ語を。次の文より何を
だ。こゝハ絵にハあしぞ。

宿木巻

きく姉薫うつろひたてく　四の事　下のでもじ　清ムべきこと。捨きふ。くを
しくいつるがごとし。うつろひたてくとハ。全くよくうつろひしるといふし。

なふをかハ和どの給ハまる　云のひら　をハ。ヒの誤し。此のり抱。何とかがらん
とのゝ事ふし。薫忌の心。志りがたきなふかくのさまふし。何をかハ示てそ。
ましがたし。侍臣ハ志ひごとし。
まげ名ふそこと　同　かれの里抱をまうすべき事をども。まづ名ふそし。
法言　霜ふ何へぞこと　同　下句。上ふおまへの菓。うつろひたてく。さかり解るといふ
なること是し。うつろひざかりそし。うつろひしるうへの又一盛り也。
やがて何とゝえ和ましよりハ　十のひら　或抄ふ。むかしよりも姉ごとくり
てそのまく山里ふしゝえこもりてあらんよりハこゝといつるよろし。
湖月師説侍臣。ひがてとし。
和まぐ紀まぐきくふ名里　十六の事　必ス引言をべき詞也。

さらばいかゞハ待るべからむ云々　十七の歌　待らばいかゞ待る方ニ居ぬけんとおぼ
し給ひてぞとくふし。さて蕙風乃こゝへに。ほがやうゞ待る人なぐに。お
意なるやすこ所ハ。小おもて所どのかくまゝるところぞかしとのうなへ
ふし。此言の語。かく結ごとく。下上りしうちかへしてみ給べし。
思ひくらぬるんもことになくて　廿一の歌　山里に住よりしほどハ。世中と
思ひくらべて。世結うきよりハ住よしとも。思ひぐりし後。今世中に出
てぞ。加の山里結ちこよかりしことを志まるとし。細流の説ハいさくか
しるがへり。
がに此世を　廿九の歌　がにとハ。白玉乃。後の世を祭り給ふをうきてし。
清らき法心を見しぬべけれど　日　だハ。どの誤し。だまてハ此ぞ。

あをこ給へしこゝ　廿一の歌　下句。白玉のいかにおきなまてかへり給ひし
給ぐりなるらんと。所歌の白玉の法心をおぼつか給くおぼせるし。
何ゆりに給らけし給ひて　廿二の歌　給ひてを。捨きに。給ひてかといへまど。
こまハ何ゆりに歌がまゝ給くならけし給ひてのこと給るべし。
くやしに紀にも又がに祢を給ひまゝ　四十四の歌　捨きに。六帖未詳に。神山のこ
をうけ茶乃ほうらぎに悔しくもがに祢をのこぞ給く。がにといへる
所。此事ハ見ふ。
給ひいとうにこ給りけるとし　四十八の歌　どもじ衍なるべし。
家てそさきに給ぐ　四十九の歌　捨きに。六帖にし。人よりハ家てそさきに云ふ。
細流に此事もじ後人なれどと引まるハ誤しといへり。此事花ちに。

即云帖とて引まてり。細白一本ハ人なれど。一本ハ人よりハとあり
細流りハ本虫をもんぞ。花鳥は誤まる本を引まてるし。
あみまきめるうく　年は初し　口の白おもてハ。これだかり事。香バかりの方ハ。
とぐ下ふ嫌く見える抽し。拾遺集雜春は家。春るて發たてふ春る
梅をとぐかハかりぞ枝ゆのこれる。詞虫を考ふべし。これハ表ハ無だ
かり事て。下ふこまばかりのきぬかまより。家ふよることし。
そぐろさむく花の家をもて行きびて　年口のひら　ヨづかふ花の家をもて
あきびあふおどのるすをぐふ。そぐろ春花やうふおがきよし事て。老人の
まいて花をぐ。むぎふ志り給ハぬことぬいつるし。えんふとよき切て。
そぐろさむく花の家をとつぐきて心ぬべし。

先づしかるるす船先まだ　同　だハどの誤か。花鳥細流などの法説のご
とくにてハ。船先まどくしてでハさハ吹しがたし。もし本のまく船
だ。白京の中ふのはさめるハがくまめやかるるすまでし。ひつかひあふを。先げ
らしくしかり船るはるすと。白京の法乳母ハそしつとなるもをといふるべし。
花鳥ハ。おとまり志らぬ法乳母などハ。白京の法後見の方。おつかるやうふ。
そしつと中ほしと云り。
いとおし此人ならしやとぞ　年ふ此ひら　此蕙るんハ。家ふもおとり給ハぞ。
人よかしづかれる。老人なておいしませバ。人の身のうへのさびしきるす船
どハ。むげふ志り給ハでもあべきは身船るふ。宇治家の法をさ家事て。さる
すをなしひ志りて。深くんふいまあふを。いとおしき人ならしいといふ

なり。いとかしきとハ。薫るをいとかりていふし。信ぞも知がてとし。

むかしをおさへしるゝ　六十八乃知　或物ニ思ふことをおしこめしる胸ハ。くるし

きものをといふ。下心也。といふるよろし。指さの報も能ヨ。

ぞまふぞ志てやをかしらぬ　同　むかしハ言といふ後うけて。ぞふぞといふり

先ハ薫るの下の心を。冊子地よりいふし。

かぐりぐふ行る程ど　六十九知　河海ニ云帖　意しさのかぎりぐふ行るゝ

とけり。今薫るに此。此事を通し給ふ事ハ。宇治の婦人の意しさ乃。

限ぐふ事て。今ハ意しさかど程らバ。今中人此つらきに。志ひてかくハ程げ

ぐらまし物を。かく中人の清らきに。深く歎くも。婦人の意しさ

の。まもり給ひがてきよりけことぞとし。

みくらし河ちかに　同　孟津の説。よろしきやうに吹ゆるを。もしかの乃説

のおとくならバ。みそぎ川などいふべきに。みそぎ川としといふハ。猶

意をぐ此ことにやわらん。意せじ意まんとのんハ。婦人へんの淺きなと

なる所ニ。婦人のよ先。いとかしきことく。思ひやらるゝとのうなふし。

細流などに。佛のそこよハをきこそしとけるハ。かれなど。意をぐと思ふハ。

佛のそこりハ。かれふべきなるし。いかでかをきことけらん。

しるくとも意しと　同　思ふ人の形を。意ニ出します。彫刻せします。もう

こしまての後。河海にし引出し出しまり。

花ぬらせるしるくと　六十一のひら　此事。古物語にしける程なべし。

河それにかぶえ程り給しり　六十二此知　程りとハ。たゞめ此かどハ。何かハ

むつびけんとおもひしかども、今ハいつしかおもひわすれやうにおもひ給ふとなし。
人のかいふもいつしかにて　六十五のうた　人のとふ切てんねべし。人とハ源氏の
きいふま人の事の、まがかいのおもくかもいつしかなし。もし光源氏の
あるやうなハいつしかで、姉君に似たるハのこなし。
いくかしこのまどまして云　曰　本丁をハさづつるハかしこのれども、いく老
ていとおとろしに形にあわするぬ分に給ヘバ、実にみてまするんハまして
かしこのまバづましくてあんとなれし。
ゐでるをみりしまへ云　七十二のうた　此ハ陸奥に在しほどの事あ
みべし。上り、若陸にありて後も、おとなしまづいりしとなれバなし。
るいふがあとよわ　曰　或物に中君の女房にいはれいつ、そのまゝあるべし。

かく派おあはせるすなと　曰　なの下にんを落きるし、なんとし。
こしふなど　七十三のうた　細流のごくあるべし。下に白衣の袖におりしき
流くの稲とはれバ、蔦ツタの中の一種の名なるべし。ここも然留。
云やどり木とふく　曰　初句、むかしやどりし所といふことによりわきとる。
住に一生涯よりなる後なく思ふなしといふるハ、そこによしぬきとするし。
云住にいでぬ云く　七十四のうた　井寺をさとへるなし。
うつろひなてで　曰　細流に葉のさくわあるしといふハ、さてでといふ袖に
名をなどこて此なくべくし語にもるが可。
びをねまそしへ作るハ　七十五のうた　此下に古へハそぐ道てまきんそといふこと
を女ちてんねべし。

宮せらるとあれバ　六十七の巻　後光宗。殿院にて。左将ぐさきこといへ
るがごとし。此也にも多くある詞なるを。狭少しといひかねてぞや。
これらにかなへしまれるどなり出バよく　七十八の巻　こゝなるとハ井戸のま
しまれ方をいふ也。　僧位に上卿など二条院とんかなるハ。むかしき
御の二条院に参り給ふよしハ。此文にも参り給ふて。上にあるをや。
やがて参上給ひ　同　其後二条院にまゐり給へるにも。もし白文へ。
井戸の仏方にむかしまれたどある所に。そのまゝ其所へ参りかなふ也。
寝殿をゆづり給ひ　八十三乃巻　寝殿をバ皆のとおび女二宮へゆ
づりて。母宮その御へぞと。まてハくしを取りて。寝殿の内
をよりて母宮をバその寝殿の内の西おもての方へうつらせたまひて。今

住給へる方ハ。女二宮のおはしますべき所と定めたまふ也。されバ西おもてに
うつり給ふを。母宮の住みし也。　後に女二宮の御おもてにうつろひたまふ意
きこえとあるハよろしがら。
浄飯んぞ堂ありなひ給ひ　同　これハ寝殿の西おもてと法念誦堂を
の間に。廊をつゞきて造りてあるをいふ也。されバうつらせ給ふ西おも
てとつゞき給ていづる語也。つくらせたまふまで句を切るハ。むかしきこし。さてさ
此度ありけるに。廊をつゞきて造り給ふにおはるし。さにあらざれど。さて母宮
を。西おもてへうつろはせたまひ給ふそ法念誦堂へ便宜乃方なるを以
てなり。さる故にし法念誦堂おはすハいづるまでそなり。
さるべきものおはせ給ぞ　八十八の巻　此下に出ていふべきこと。これより

上ハ、夕秀忌の詞。此下ハ地の詞なる。さうひなるべし。

おもしまれ殿　八十九のひら　殿の字。そのと訓べし。おとゞとハよむへからず。平

まハ、候字まて。そのともを。

例乃はしと　九十四のひら　さ紀ふも。こゝにやどり給ひとれバ。今ちじめと

承和りも行らず。例乃はなす給ひバ。何かハたぢ給ひんといふし。上文り。

たゞ先もこゝになんえといひ。下に。此二月になん。たつをまうでぬとよ

つまふえくと見えたり。

又ゆかしくなりつゝえく　九十五のひら　二とびのミ給らず。いく度もく。のぞ

きたまふし。つゝといひ。立よりくといつるに。さきこ見えたり。

此殿のはかりにもえく　九十六のひら　此せうそこハ。兵の尼が。薫忌に對面

しまゐん。そ給ひへ来るんとのせうそこし。下に。忌もやをら出て。御ぞ

などき給ひてぞえくと行る。ぞもじ出て。そのよし見えたり。

京かゞ寄給えく　九十九のひら　寄も多きに。かゞ寄をよミ給つるハ。親の婦

忌りし物なるこゝにとりてなるべし。さて。こゝもとよめるし。

東屋光

思ふ人ぞしるハ　云乃ひら　思ふ人を。父をいふ。者陰が子たハ。母のミ給ら

ぞ。父も具しるよしし。

さるとよりしり給へりと　七のひら　しり給へりハ。しり給りといはんがごとし。

とりゆしこし　日　うかゞひゆせしといはんがごとし。　傍注ぬがごとし。

なりらひて　日　まべて此詞ハ。かとりへ法くやうなるし。此下に。かと

きよらにかかひしより　廿三のひら　或抄に白気に中忌のお意しとる也。
かむのきこえ給ひしより　廿四のひら　一本に加のきこえ給ひしとあるよし。そもそ
よろしかるべし。老陰ちゆかんのきこえといふまじくおぼ也。
ぬなびしると　廿五給ひしら　るハ望の誤也。此歌つゆにおれし。
見なりしらばなりにけるべしがうるゆ　同　指きに行るをとハさてもあるをし。
といつるにても笑ゆ。又さてもあらるくをとゝ見てもよろし。然るども
此わるハ狂き詞にて。しらず孫だこそあれ程どいふ歌のわるとゝ一つ詞
のたらきし。たゝことを以て見るべきし。
うれし歌給ひし　廿七給ひしら　みちのくの給なるべし。うれて思ひの。といつるに
もよしあり。老陰のすハ次ゆ。浅くも山のうしといへるハそれなら

べくも。まゆ陰奥をいつるにてよろし。
あらハにをいひなさで　廿九のひら　薫君乃今常を。ものうしとのゝ歌
なんを。女二宮の法のさざるにつきて。おもやをにたゞ身なる所に。あら
をにそのゝるハぬ。用ことし。
いとうきとれやう給ひしに　卅一のひら　やう給ひて詞切て。薫君のうづ
らしなすし。うれしきやう給ひ。此身ハ。あの法にもうくのきし。
佛ハまことし給ひけるを　卅二乃ひら　まことし給とハ。まことの事の歌へ
をといふことし。そらごとをといふに同じ。
なきかれをしらでゞ　卅三乃ひら　ら給をとれ世とおぼさバさやうなり
なきかれをバしらでゞして。しらでに志を給へといつるにて。引歌給下句のきし。

おぞき人まで　六八乃ひら　拾きかいつり。

右近がいひつるまゝしきもえ　同　上の右近が詞り。まぐおぞ給ぶらもよ

ぬしで。又はかうしをそしきかまぬりてなどいつる。浮舟君の居給ふ

ふよりて。殿ひてくいふ詞し。女房どちのゝ居る所にていふ詞にあらじ。

大夫は　ゑぐいま給んえ　四十給ひら　こゝで今給んにて。句を切てんはべし。系

里つるそこにとハ。此は使のこ給へ系るそこにてといふし。おのが系りつる系

そこにて。大夫ハ。こゝで今は車を引出る後見給りつといふし。　弄花に。中気

大夫も系りつるとかゝるしといふハ。しゆがつり。

よしゑとかしゑとおぼしさせ給ハん　四十一の詞　おぼしらしとかゝる本ハ後に

さかしらに改名つるし。まべてくおぼえといふ詞ハ。思ひしといふことなしバ。

思ひしさせ給ハ先。といふに同じきをしらしきにてハ。思ひしらしとなるし。

きしいとかしがり　同　笑ていとかしがるし。きてにて句を切るハ。おがてとし。

此はす給らざらましかバ　同　拾きよ給し。

いかにおぼしらんと　同　こしハ君陰が方給す給いつる法ぐき給しバ。母の

いかにおぼしらんと給るべし。

かくのゝみぐりがたしくえ　四十三の詞　白菊乃。かくのゝみぐりがけし

くおもたるやう給る人をといふこそにて。白菊のさ夜につきて。そべて

の人のうへのすをいつるし。さてさる人をえ給しバ。ふやさ紀かさも

かゝる後。此薫君ハ。さやうにもあらじ。えくなしバと。薫君の性をい

たんとて。くらべものにまづいつる語し。

おもふことをいはぬ人　同　中品ハまくらの浮舟君のことをバくハしく
おぼえて此句前のこゝろを、薫君のおぼさんにかはりて、ゆかしくおぼえたる
中君の思ひあふする時、又思ひよる人といふ事にて、人ハ浮舟君也。
おもかげかよふあるも　四十四のひら　こゝにて句を切て、おとろかいとの
くといふへりきてみるべし。湖月本に此下におさがふてそといふ詞
あり、これをおとろかにといふへりあり。
いのちの待らむやうなる　四十七のひら　様ま説、終るべし。
あかぐしかりけれ　四十九のひら　ふくもりけれ、ふくるきハ思はる人多く
ありてそのかひなし。
何かいひのこるぞとよ　五十二のひら　今かねの方よとしるを、その方ハ何

すきのよさつらんなかく　あきてハかうじて、思ひかへさる残ぐ、さきが
かいぐいふ事、こゝろにかゝる方をよせてやある也。
方恋そゆかしきを　同　まよハぬ也、薮までハ、みづとぬるとよとへるまハ、
浮舟君に何の子細もなきかといふ也。
今さまし時の光なりけれ　五十三のひら　母君の心に浮舟君をバ、陰方にさぐ
まうけしと思ひ、殊に八宮の御子也と思ひきかんすれども、薫君乃見玉
王殊に女二宮也。又一品なの光なりぬをいふ。今ときいとしといふ也。
此時なり、又下の文をそも見るべし。
母君かかりやと　五十四のひら　これきハ見て、写し給へる也、さて
うつし奉るにいかかりやときまんをいふを、其しかかりとたり

と誤る事なるべし。いかにやまいかにまれぞと。そぶらぬ詞し。本の
まゝ出てハ。むげに笑しぬるす事を。注どもハ。いみしき強説(シヒゴト)し。
なかくしれるすぞ也を　日　例の実を。業式部が早下事なる。まことに此
文は事なく。しきやうにんれらしとる注どもハ。いかにぞや
みげからやをかしこに出あるぬ　卒六の歌　古と集の。問ひ。花をくらく
しるとしどにも人のんりしのりしやハをぬといふ文と。同格のてにをハ
まて。しづからかしこに出給へりしといふ意し。
ちりきほどにてそ　五十七のひら　てそ出て切る語し。ちりにかどにてそ結
しといふことなり。
いがしまり先　日　しまりめハ。姥(トメ)を。書使りしまを引ていつる出て。老る女

乃ゆ事なる。此相語のこと。好きて人の媒を志ありく者を。伊勢
しまりめといひなりつるすまし事なるべし。
ぬなりびとる先し出て　五十八のひら　ぬなりびとるといふこと。何の用事にか。
いふべきにあらぬ。さまバこまハ。ざるを。とると写し誤る事なるべし。此
所乃志は中にも。ぬなりびざるをえりてし。
かの殿にてそ　六十の歌　常陸が家のすし。此家につかふる者の詞なれバ。
うやまひて殿といいつり。此時浮舟は母ゑ。むらちが家にあり。
きしをしらぬなのりをして　六十一のひら　おのくその賣る物の名をよ
びつゝゆくをいふ。
よもぎは事何也　日　きこえぬるすし。もじは誤などにや。

かしこも志るべきてハ云々　六十二乃ゆら　こゝにてハいまだ宇治へともいゞ
こへとも弁ふものゝ毎をぬそろし。されど上の弁が詞ふ。こゝにハ元系
らじといつるも宇治へなることハ志らざれどし。又下ふちり紀ゐどふやと思へ
ざ云々といつるをも思ふべし。かしことハ今ゆく所といふ事にて。いづことハ
のゝ毎をざるし。
朝日新聞云々　日　此語にしよりて見ましバ。上の引へどてとましバのだハどの
誤なや。又此ふそ長。うそ抱なれど。日新のさくよし。これどといふ
おほてハさらし云々　六十四のひら　細流のおとし。おといふ説ゆゑし。
うちまじりてぞ　六十五のひら　まじりとるふぞ。とまべきとろし。
浮舟光

のどをさるとるはん　四のひら　浮舟ゑふ。自家ゆすの出来る。下がまへふいふし。
さらしいと毎なきやうふも　日　或抄ふ。女二家又浮舟にてしといつる。然る
べし。さらしといつる。蓋ゑのうへふかれつり。友信ゑくなり給つるなと
いふ。さらしといつるふ所ならむ。
もて和づらひ給つるは　五のひら　うきとりとる志の。大輔を。いづこふゐるふか
と。ゑゆゑ孫とるをいふなや。
はゝさらしふも　六乃ゆら　家づかへとる人の体への多なるなふ。主ゑのるふ
なて。主人のうへを。ゑさらしといふし。
あまざぬりぬ云々　八のひら　拾きゆだとし。さて上の詞ふ。法らぬきゑへ
とる技りと所る。技を。上りし。ふ松ふつきとるとまて。松し。さるなり

松のことばよりなるべし。扨二句ハいまだ年へぬ松にハ侍らねどもといふこゝろなるを。杖(こえだ)摑をこもりしるに。まだ年ふりぬといひ。松を。下句ハ結(ツ)にこもれる成り。物と見ていへるなり。扨て結(ツ)といふこと。ふることハ何をまつとも。すじふるきがぬくなれども。上のまだ年ふりぬといへるにうけ合せてぞの年舊(フ)りぬる波結(ツ)とはあるべし。是ぞ成波見ゆること。我がうたがひなるなるべし。扨て松の年舊(フリ)ぬ波をまつハ即ち千代結ん栄えをまつことにて。祝へることハなるべし。なきほども此説にてハ本末ことわりなく又ま川といふことも。叶ひがたし。

いづれ人よりハたゞし　十九首　いづれとハ人よりハまさりたる意をあらす人なるが。いづれいづれとかまさりたるぞ。まさるるすハなしといふこゝろ。

たんのどかならし　十五首　白河の夕暮太后は家の為に逢そ見給ひしころ。かし中務は。心みじかく。うむき侍りし給ひ。今はさんちひハおなそまじきに。其時。さかしらなる乳母などのなかりし故に。心のどかに給んだるし給ひし故に。今ハ老にたりとやいへるなり。上に。昔も今とも摑給んじ志てのどかなる人をさいなみひとり見なりて思ひにまかせていへることなるべし。まちかくいへる。深舟為にも。心ちかく。叢為は怠んを見なりて身への事なり。

なふだかり給ふまじくかなへ　日　上の深舟為のいへる詞を受て。中為の親族とは志かり給ひしいかばかり給ふ縁ある人ぞ。いとよく似たるものかなとおぼそし。

おやハまるべし　十六首　宗おふざしくて。親にもえてもりまへといへるを受て。親ある給ふんと知りまつるし。

物もの[illegible]ハ　十七日[illegible]　こゝハ既に深舟ゑに近付給つる所なるに、もの
いひなバ、もしやまつ[illegible]んとおぼして、のゝまハぬし。
いさゝかいふかひもなべき儀　十八の[illegible]　さらしハさべきやうもなべきに、といふ
ことし。おしハんづよかるべきをとしといつるハ、何ゝしとぶつり。
又[illegible]記こと[illegible]ハ　日　和ふさべきやうもなきバ、とゞ泣[illegible]ゆかれす
なきことし。[illegible]きこすとハ、孫をのこなくといふことはじことし。
[illegible]ぐ[illegible]をふあく。[illegible]の人[illegible]こゝろづる。右近[illegible]て[illegible]り。日　[illegible]やう
に[illegible]を切て、[illegible]くとあるハ、別[illegible]れ[illegible]しきに、[illegible]しきさ[illegible]と。
[illegible]よし[illegible]せるし。
[illegible]もなかりきる[illegible]あやまち儀　十九乃[illegible]　[illegible]のすハ、[illegible]が[illegible]

やまち[illegible]と思ふし。　[illegible]ぬがつり。[illegible]きハ、こゝろさべきこと
を、こゝろもをざわしし。思ひよらざるこゝろをかゝらば。
人の[illegible]ざかハ　日　人の[illegible]ざ[illegible]ハ、恨[illegible]もさべき儀。人の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]。[illegible]白[illegible]を入[illegible]なりて、みづから[illegible]わやまち[illegible]ハ、[illegible]儀
[illegible]むべきやうもなし[illegible]せんかさ[illegible]をかゝさむるし。侍
[illegible]いふし[illegible]ことし。
[illegible]ていふかな　日　右近がさざ[illegible]て[illegible]儀。[illegible]しく[illegible]みむ
[illegible]せるに思ひ乃和ふ[illegible]しきやしゆ[illegible]とおぼせし。
后[illegible]よりも[illegible]て[illegible]　[illegible]のひら　むつかり[illegible]せ給て[illegible]。もじハ、
衍[illegible]。[illegible]させ給ふとさべき[illegible]し。[illegible]まづこれより[illegible]方が[illegible]て、中[illegible]よ

ことも白文へは役をして、中文の作せらるまし語を、その法役の白文へ
申せるよしにて、左の大原もといふより、いとかうきといふまで、その
中文の法詞を、結るにむつかしせ給てといふときは、人にしらるまさせ給
えぬえくは、左大臣ののゝ事ひし詞を受せ給ひて、のゝまふ法詞のご
とく受し、すべて内などにといふよりは、左大臣の詞とは受しざれば、
もしは相先輩相ることも所るをといふまで、左大臣の詞先とも思へど、
もし結らば、其下に相どのゝ事ふとか、などいふ語なくては、中文の垂(タヾ)
にのゝまふ法詞との堺なくて、文とのえざれば也。
きそうは人 其文のひら 受しにふきことも、一本にも、きんそうは人とも。
そうおとゝ其人えし 曰 ゝ事にそうごとをさへいはせ給ふと、時方みづから。

むじ事法覚じにといつることゝ候ふ也。
ゝさうは結法を 曰 ゝさうは結とは、時方が身のえへのすゝ相とバいふ、主君と
差別しる詞也。
がにいかでなりはせ給ひ無 曰 がにとは、上の中文のゝ事つるよしの語
に、人にしらるまさせ給はぬ法ありきはえしと所るをうきていへり。
まちどを相るとがおそうりをもしらば 曰 白文の無ひ給ふことは、もし業
君の事ならむ時、深舟君の詩をにしふばかり、とゞえおく、みづからのお
こゝりをバ思ひだして、深舟君を恨えん、さて恨えらるを結ひんるを
さへいとおしく思ふとのゝまふ也。
云 後をもえく 其云乃ひら 後をぐに狭き裡にはせきとゞめかしれば代数なら

ぬ事ハ別をばましていふしてからじむべきとし。

まぐろ賦るすも　廿七のひら　今白玄の薫忌のすゞめのこまふを。おとぶら
ふまぐろごとふしてのこまふ。中忌は詞し。　注いたくしるが下り。

まことふ法らしと云く　日　家もし忌ゆ。去実ふつらしと思ふるすがらだ。
忌ハいかばおぼをべきぞとし。上ふ中忌の。かは薫忌のすゞめ。まぐろごとくのこ
まつるなふ。もしまぐろごとふハがらで。去実ふ云くといふことにて。まことふとハの
こまふし。

まえやう賦るを　廿八のひら　今白玄のの事ふ事しきは。法をかならば。まえ
やう賦るといふしくおぼをし。

まぐろ賦る人を見るべきて　日　薫忌ハかやうは忌べきことにあふべきものとハ。

思ひもかゝ事語ハぶりしゆもて。まぐろする人とハいふし。

がりやなしやをいく　日　こもを中忌のまづりしくおぼせるさまふ。注せ
らもしるハいかば。中忌のふまゝ。云く賦どおぼをと。上ふいへもバ。ちくハ中忌の
ふふも詞すもがらば。ありやなしやといふ詞も。中忌のふとしてハいかじし。
さもバこもハ。白玄の詞とてそ事也。中忌の。薫忌ふ事もあるかと。結ハく
を。さるすハ。きしう賦かりしう。しかふ事明らめぬうちハ。そしまらんも
まづりしとし。さて白玄の詞ふても。又とひ中忌の心詞ふても。まづりし
の下ふ。玄ス語の落しる賦るべし。こゝろこふ補ハば。云くまづりし賦どのこ
まふおどふ。内よりこゝ賦どあべきことし。本のまゝふてハ。地の詞へうつる
場なくて。文そのまゝば。

きのふのおぼつかなさを　日　こくハなやましくといふより、法師の絹にて、
こゝ様どやうに、昨日のおぼつかなさを、申し出べきとつぐくさし。
むじ里どろといひながら　廿九のひら　むじ里どろしる人といひながらも、何
まり様なるよといふさし。
ぬよ様かりける　日　なべての人とハ、鉢の和にかりしるといふし。山崎しんとハ、
むじ里どろといふからいへり。
夕つかたしらにしたこゝ　卅のひら　久しく絶へておかせし時なれど、まづ深舟
見れ方へおりてべきなる様なに、さハあらで、まづ佛などをがみ、何らも
として、夕方に様りて、深舟見の方へおもせるハ、薫見のさ夜ぬ、旬高とハこ
よ様くて、いとも志げ久に、のどやかなる様どをえをしる、おさなし。

氣をとしご行ける人をもこゝ　卅一のひら　思ひかけるとハ、深舟見にのみ、深く
心の留るから、銀の人をバ、思ひまて、繋のかけるべくおぼさといふし。
湖月師説、深舟に思ひ久むとのる夜ひし、といつるも、さともなべし。この時ハ、
年ごろ見ぬひし人をも、思ひまひし法心の、深舟見の方へかけるし。
もりきかせしくらんと記　日　くらんハ、ゑ夜そんの儀か。
いと深うしたゝぬべかるバ　日　此下に、語落しる様べし。
月ごろ行こよ様うこゝ　日　さ記ぐくハ、ひごえおきて見る時も、此度乃
やうに、抽思つる事しきも様かりしに、此度ハましにハいくらかけて、
抽思ひし事様るハ、月ごろ見ざりし事に、抽の心をこ記まへ見る心もまさ
ぬて、稱びまさりしるにてそと、旬高のすにつきて抽思ふとハ思ひで。

薫忌のおぼをるなり。

おのづからうる海じき浅　廿二のひら　こゝまでハ薫忌の間、此下ハ地よりいふ間

なるに堺なきハ以ゝ。

東のかどにて立かつりえく　廿三乃ひら　東のかどにて、とうるなよ御し。東

の間ばかりにて、是ハそゞより結ぶことなくて、かつり結ハむを、おかぬすに

おぼをるなり。

さまたるときは本れ　廿七のひら　いまへ此語に、よに老づらしき橋乃古木

のまて、そまによりて、橋の小語とハいつるか、もし結らバ、此ときは本といつるハ、

こゝ橋の本なるべし。結ぶとなべてハ橋りハ大きなる岩のさましてといふ

ばかりの古木ハをさくなきもの好きバ、こゝハ橋ハ行るで、何によれ

ときハ好る本浅いつるにも有べし。

いとゝ有り好きどえく　日　ときハ本をしも、有り好きどく　いつるこゝハ次の

あと對へてしん語べし。心深き人の契にくらべて、其本れ情なき物なる

を、有り好しとハいつるし。有り好く情も好きは本ぞに、今年も殘なべき

さまりしかゝる物を、まして今心ぬりしかくらに契を、いくとせぬと

とかたらん、ものかはと、あへかをてしんべし。

永きむかし浅　廿九のひら　女の家に毎ふをきむといへば、川向なる宇治の文の

方浅、かくいつるなり。　注に、京の方をといつるハいみしきむかしし。京のうた

ならバ、とゞに京れ方とてそいふべきを、いかでか家をむかしとハいはん。そ

のうへ本来ばかりしかといふことも、京れ方にてハいかゞし。

[illegible]ぬりみぐるもしらし　四十四のしら　中宮にてぞとハ、蓋忌へも、白妙へも、一の
しらふきよりぞ、中宮なる身ぞとつふ、さる所に、白妙の、此詞をとがめ給し、
[illegible]ふきせ給ひしくはてうづしく　同　[illegible]女さ、かゝらぬ裳とき
[illegible]礼儀なる所にて、[illegible]会せしる侍従が裳を、浮舟ふきせてし、
そのほどかのへり　四十五のしら　そのほどくハ、ぬてかくし給ひんまでのるし、注
おやまりなるも、
おやかふ子ハ　四十六のしら　白妙、こづかしの身をのしるかつるにて、此母中妙の、
きびしくいさ[illegible]あふすゝ[illegible]かくのこゝ[illegible]つるし、引妙の上句のこゝ[illegible]用ひか
へしるおもしろし、さてその下句ハ、そのまゝ、そのこゝ[illegible]用ひしく、殊にし[illegible]
[illegible]てのこゝろをこ[illegible]て、のこまつるし、　括き[illegible]

とがんにもきぶをみてしく　四十三のしら　永んにもと儀切りて、疵をてハ、身の
うへのすし、んにも疵ありといふ子ハ[illegible]ば、永んにもハ、下の思ひみぐるくと
いふへかけて見るべし、さて疵あるハ、白妙のすゝ[illegible]て、これハ身のうへ乃疵
よこそ[illegible]也、んの疵とハいふべきにあらぬ、
おろかなるにやを　四十四のしら　或抄に、此ほどのそぐえを、おろかなるにや思ひ
給ひん、んの中ハ、さも[illegible]ばとし、といつるよろし、又上より[illegible]つぎを
もて見るに、そ[illegible]より、おどろかしも[illegible]ぬを、永[illegible]思ひあふことの、
おろかなるにや、といつるやうにも[illegible]、いづ[illegible]も、やをハ、とぐやのこゝし、
ながらへをつるまじ[illegible]すぞとこゝ　同　白妙との[illegible]、末長くハ、[illegible]まじ[illegible]
すぞと、思ひなして、みづからいまし[illegible]る詞し、　注し[illegible]がつり、

字かきそらしえく　四十五のひら　うきて世間なる身をも。毎宮になさばや
とつぐくさし。さて宮に相さばやといふ事。宮ハ。行へもなく。きえう
する物なる。そのごとく。身も。ゆくへなく。消うせ相ばやといふし。
まじ足相ばと　同　古今系物名に。新云。夏の雲にやまじ足にしを
とハきをどろうよしとなき。此字し。さてかくいつるこハ。夏身ハ。宮と
なして。消うせ相ばやと思へども。さもえあらで。蓋ふりむかへらも相
ば。といふ意。此字にいつる夏の雲によせて。志の古今系の字に詞をて
いつる。さて今の字の下句乃こをとりて。もし蓋ふにむかへらも相
ば。ふりとハきこし。先きこと。逢えなるよしとなからんといふ意し。
引字にハ。まじ足にしとなるを。まじ足相ばとより相しるこいとかりしる。

字法也ぐしとえく　同　身をしるハ。此字にてハ。夏身をうき身としること
相るを。今の本字によりて。身をしる毎といひ。さて下句ハ。身をうき物とし
字に法也。いよく。後も。独におちまさるよしし。
大義といふなるものにえく　四十五のひら　障子をならしるすを。此人に
作せつきら歌し。此人にしたらしるにハならば。但しぬがつり。
いと和り相くなるうちに　同　此うちにハ。ひり相しといふ中にも。別して結
にといふ意し。字法よりも。えしといひおこせ。これ別して結にひりなきし。
ひり相くあるならばぐにといふ意にハならば。
ちくにもえく　同　白文の法方も。おもし後さんすハいとひり相しとなる
をうきて。ちくにもえく相也ば。おもしまさんてハ。別して結にかさかるべ

〜〜ナルヤうシ。

さそふあふうバとハ思ふど　日　淫奔ニのみ旨美をも。思ひ染ミがほニ
あもどろ。まゐて旨美のさそひあふ方へゆゑもとハ思ハぬ。ハ乃
ん。まべてけでうし。それバてそ。思ひとびて。身をわ学とハ一つも。
和乃宮ゐどや。あ〜んと　ハナセ也　ぴのど行うべし。
いうおるハそうちぞと思へど　日　思へどハ。思へどを退ミて。毎の。淫奔ニふ
うふるべし。さてかくいひ〜うふそ。ま〜膿妊ふてもうとふさ
ぬるか。乳母ゐどが。ふ心信も。月のさうりやうやうるよ〜いる和ミバ。毎の。
ん和ぬるおふべし。淫奔ニのがう〜いう〜あごをし。思へどまて
まがうとう〜いう宮ミバとふと。ろごや和ごび。よ〜味ふべし。



えのうへあどのやうのかうう　ハ八のゑ
和ぬべし。婦ニも学ふかう〜きさバ。中ニの旨美のかた光。中ニと淫奔ニ
ふ。筆ニのかた方光。中ニと淫奔ニ。ま〜ハ。中ニと淫奔ニ。ま〜ハ。中ニと淫奔ニ
和ぬまべハ。中ニと淫奔ニ。ま〜毎ひのふやうん。婦ニも。淫奔ニ
と中ま毎ひのそ。というごろ〜ま毎をさそハ次乃文ふ。とがむそめハ。
ニと人ふ。というふ和ぬごそ。ま〜ハ。弁がうごば婦ニと中ニとのうまを
のこいひ〜。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。
むをんハ。ま〜人ふとハいう和ぬ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。
ふやう和ぬまニ世のおう〜をてバ　日　おま〜をつとハ。筆ニのかんうで。和ふ
ゆく。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。ま〜ハ。淫奔ニふ。

何も続とおぼしぬべきまぎれなん　五十二のひら　薫君の御船をし。
ぶやうぶらん　五十三のひら　河海に政官し。右政友は被官なるなし。とあり。
人なりまらハを給ふな　五十七のひら　白文の御舟ゑに毎ひまふを。ゑらぬよと。薫
君を。人のまらぬべし。さやうに家を。人まらつまやうなるまゝ君まふ
なといふ事なるべし。
しがことにて何らん　もえ　日　しがことくハこれを。何なるよりの事へることり
かけらで。そのまぢに何らぬことをいふか。薫君の御らり。彼らゆるえとある
を。ちらすにかけらば。他ヨリ（アダシコト）をいひて。五ます先しむも。何やしくいかば
是バといふなや。
何ないとなし　五十八のひら　こまより右近が詞し。

一ゑくにおぼしけざ先てよ　五十九のひら　薫君に申れ。白文に申也。いづ
是へなりとも。一方に思ひさざ先まへし。
ぶざうは物ものども　六十のひら　不道無道などいふ説いかば。もしハ武道
にもあらんか。河海にハ。ゑてう不調とを。こまよろしかるべきか。
かなるべく　日　里ハ。家の程なるべし。
いさや右近ハとてもかくてもえ　日　右近がいふをハ。御舟ゑ。薫君なりよ
里給ふとも。白文により給ふとも。いづ方にもあらず。事なくなさせ給ハ
んことを給ふといふし。侍臣に。白文へとのまゝ。同心ならばとしといへ
ふなるべり。同心ならざるにそあらば。事は出来むことはあるべし。
まさえ思ひとつまじき　六十五のひら　まさハ又なり。

ものへをかなしくて　日　不堪し。不絶にハ行ぞ。

いざなげなり　六十七首ノ歌　落まぎらし。下ふ見の句いざなきと行るも日ぞ。

句　いづくふかるく　六十九の歌　此句。意ハよく聞しられざとて。ふ行るく

の。よし難く此句ふ請きて。見やかくやと論じきる時ふ。多くへ手なる

三井の寺の蔭が考へていろく。此句ハ上の作者が申せる体の下へ請きて。

即チ作者が申せる詞ふ答へまゐる語し。さるバ此句ハ作者が詞ふかゝりて

まゐるべき時ふもあがりし世話へといへる見うきて。哀いふをふえかる

あぢといふ言なる見。ふ定まらぬ山をといふふぞ生ふ行かせる。

いづくふかとハいへるし。二の句ハ。作者が身をすてゝも。思ひ重へるかり

作らん。といへる見うきていつるにて。作者が身をすてゝもし。からぬ山も

なくしとハ。哀いはくしく歌をよみて。思ひ見がたきなき方もなしと

いふ意にて。ゆくハ今の有様をいへるし。さて一首の意ハ。哀いふえかゝらば。

作者が身をすてゝ。浮舟をまがきふいるべくハ。もばかりもむぞくく。哀き

いろくと思ひ見がたきぬるを難く。その手ぞそを考へてかゝる

ぞよとし。といへる此発句よく聞しらず。たのむらくえざれバこゝふハ

よし難く。文身をバきてんと難どいへる。穏なくしぬるし。

松のやうくうにたる体　七十首ノ歌　句ふ見。俳の外く出るる体。いかしくふ

見くハ。松うくるも。海士の月つきをあれバかなるをいふべき。つら月のあさ

とまるべき体。此猶侍るるやうふ実なしぬ。すハいをくかるといくぞなるり。

うらふかく。実ふ松のうにたるやうふいへるハ。いふく。いふふ。さまハ俳のお

かく出ることをやがて、桜のうくと、法師に学ぶいひなるべき詞をもていつる也。
さる例 今は俗言にも多くも、多くは多く地へこぼして、流れてるを、測に
なつてといひつよく鳴きしるるは、膽が法ぶまてといふ歟也。
加筆ろふの事
はんざしに作るべき　七の詞　此下に、そて、もしハ已形ぐ事べし。
しゐいしやくをかへし給ふなり　五の詞　これハ乳母がいふなれば、古抽語
に行ることに形るべし。中しに經説などを聞きむれば、乳母が語にハいかに。
かてへおもしる人も　十の詞　兄弟行る後いふ下　十八のしらに、たらからしる
ハなどえし、といつるを、行、考へ合せべし。
さる人のおもしおもせぞえし　十一のしら　この文、注のごとくにも叶ゆれども、

えたるといひ、又さぞ先て、えをしとといつる、又といふ詞などを思へば、さる人
人のおもしおもせぞハ、蓋る心の方に、おもしおもせぞ也て、志のぶともおぼ
さめハ、蓋る心の方に、思ぶ名に、志りがくしと、白えのおぼさん也て、これハ白
えの疑ひ給ひんことといつるにも行らんか、上に蓋る心の疑ひなりんことと
いひて、白えも疑ひまんの意也て、えたるといつる也。さて次に、又さぞ先
てえしといつる、又とハ、改先ていふ詞なれて、又蓋る心も、しゆしりに白えとさぞ
先て、疑ひまふことハ行らじといふし。
がになきかぎりえし　同　がにとハ、上の字に、なきかぎにうれ名相がさんと
行る後うきて以後り。
後りおぼくまてるばかりぬえし　十二のしら　かごとまてハ、こてハいひるをにして

といふまさし。後ふかくつきてといふ注は、ぞかりをといふ事ぞ。
しきて思ひ人しもつ是相きと　十五のひら　つ是相きの下ふ詞落る事べし。
此の二字落るかて、注是相きとて是、又つ是相きの上ふなどなどいふ云
落るなり。
とのゐ相どふ　十六のひら　蓋は注相是バといふ注ハいとこち相し。とぞ人を
うやまひ、身を卑下しきて、かくいふは、つゆのこと相るをや。
やむこと相く物と志きまぢふ云く　同　家一人を相せんは相きふやと。銀
ちしきすも其つ是ども、其是も物とし此まぢふ思ひでこそ、何しかしらん。
もとよりさやうふ物と志きまぢとも。思ひおきてざわしする相是バ。思ひゆる
して其しといふまさし。注ふ深身のふ。相もしげ相きと何るハ、とがあり

さるかたふてもし　十七のひら　上ふ相ふがしむとりをがひ相むふも、さとふ相く
てやといふ。さかたふてもし。
いきといきて　十八のひら　ゆきぢふしとんふハ、志づし籠るべきす相るふ。
といふ意は詞し。古と来ふ。船風の物きとふきぬるといふと同じ格し。
かれもふきぢふまれぞといふまさし。
こふまとり結ふ日　十九のひら　云條院より二條院へまとり結ふ日し。日ご
ろ云。云条院ふおはせしす。下は文ふて志しまとり。
あしまちバ等は　十九のひら　初二句ハ、橘のふおひふ深身のすゝ。こひ志
のびすふらん。蓋志のかたりハといふまさし。しちぞ等は、ふおふといふふ。
等は人を志る意は。もとせとり。さて時鳥の相がバいよ〳〵深身のす

をかなしくおぼさんにハ、家をも恨と結ばんが、まづらはしきおどに、薫の
あるわハ心して明べきことぞとし。
思ひ出るもいとあり　古のひら　法使の心といふ方よ結し。
まさらしめ法心ざしも　古一の記　法の字いかで。
いかでかいませ結ハぬかと　に　下ある加もじいかで、上をいかでかと切てよめ
ば、下ぬかも、さることを思ども、猶上よりつゞきて、下の加もじ聞きぞ穏なる。
毎君ぬへわ出と聞ごを此の西　古三の記　をハ、色を深まる聞るべし。
思ひ長へよるにしへ侍らぞ　古六ぬ記　しへも堪まて、え思ひよらぬと
いふ事し。
思ひてはけむもいとあり　古八のひら　いとあしとおぼしてとけしでハ、父と

このひがくし。
うつを　古乃ひら　和名抄に、尨蹄子和名勢（せ）云々、貝類なりとあり、さ
ほバうつをハ、此貝ぬかりにて、空尨蹄（ウツセ）子聞るべし。
まどろ聞るまざ加邪　古二の記　思ひよらぬことよといふし。侍従とがつり。
いか聞りきむことにかとおぼせば　古四のひら　ばハ、ど。ぬ法し。
大将殿のかしうしてえし　古六ぬ記　これハ上文よりぬつゞきにかりて
見ほバ、注乃ぬくにも此西家伐、又薫君の、まべてくぬ心ざ殿にかりて見ほ
ば、まべてくかやうぬ文づかへ人まどに、心をかを結ぶことハ、をさくなきう
ちに結ぶけれどハ、深永君ぬすをのこ、おぼすころにて、いとゞさるまを
おもせぬなり、かしうしてけ小宰相にハ、さらしん口先て、かくらひ事に

といふにも書べし。上に屋をかくとりもちてきて、猶いふかひなきなり。
まされがくしおぼすといひ、下に、まゑ人を、きこし人よりハ志と形りさ
おぼすにかなんをみる。などいつる後思ふ歟し。
家づかひ続き事ゑし　曰　表と裏のことづかり。裏ハ、薫君の、深舟君の事。
深く歎き結ぶづかれを、家も志らぬなハづらぬ。人なとに志りて、づかひ
とハ思ひまゐらせれども、数ならぬ身形る所に、その づかひ事と思ひ、事ちて、
今までとぶらひまゐらせることもせで、過ぎぬるといひて、裏の事ハ、家も、
薫君の心ざし、あはれなることは、見志れることハ、深舟君にかとりハせぬ
ものは、薫君ハ、深舟君をのミ思ひまゐらせ、家をバさしも思ひまゐらぬを、
恨見しけれども、家を数ならぬ身形をバと、身のかぎ形らぬに、思ひ

きちて、今までさやうにもやさで、過ぬるとし。上に志のびあまりてとづ
家も、必ス此裏の事をきて、まゐらし。　括き説も、こゝぐし。
かへらしバ　曰　後撰集の家、かなづり、心をくぐしぬるらほしやのことを
見る事で、家は深舟君にかへらしバ、さしも法心をくぐき給けじとし。
家法のなしとこそ　曰　かまこそ人をおくまして、世乃者形きる事は、多く
見て、うきこと身をしり、人の見志るわど此歎きハせぬものを、ましてさ
もづらぬ。そこの、づかひ続を志るといたるくハ、うけがたしと、とが見と
家し、さて裏に答へらることハ、家ハ深舟をさまで深くハ思ハぬなり。
人より見志り家くかどの、いみしき歎きハせぬものを、深舟をのミ、ふら
くしふやうにいひて、かこちるくハ、見と形きるよとし。　ほどと、歎きや

をまるとする。何乃いきわひにしるべり。

此よろこび　日　をべて今は云の俗云に。かうじを取しといふことは。雅俗

にハ。うましといひ。俗云に。礼をいふ。礼にゆく取どいふ礼を。雅俗にハ

よろこびといつり。こゝをもちゐて。あをおくりて。とぶらひとる礼り。小

宰相が局へ立より給ふし。よそこゝによろこびとするにより。注ども。あ

のことを保まり祀より。よろこびを。何ハ也取るをりしも。とぶらひとるよろ

こびまて。あれこゝにハ。かゝりしぬことしかし。

人がらをやむこと取きに　廿七の詞　上より。ならはし給ハぬ人がらとつゞきて。

かろぐしからぬ。蓋ゑの人がらをいふし。ならはし給ハぞといはぞ

して。ぬといつるにても知べし。　小宰相が人がらにをつゞけ。

朝座にをてく　日　ぶさ。にてのことにて。廿五日の朝座にて。八講の終るし。

此おもとハいとしきまぎりれ　四十四の詞　いとしきといふより。此おもとが思へるんし。

何へなん　日　堪なんにて。くるしからじといふことし。

おどろかしぬとてそハ　四十二の詞　えくと見れバ。おどろかしゆゑしと。

中宮へ申さんとし。ぬをいはゆる手ぬし。　侍注とがへり。

例の先取まてるまぢにをこゝ　四十五の詞　例のまうきんぐちれ。女房の

局へ無ふやうなるまぢにハ何らざるにやといふし。

くもしくハきかせをらぬまや　四十六の詞　或抄に。深雨はすぬりくかりて。

蓋にも。くもしくハきかせ申さぬならんとし。といつるよろし。上に中宮

の法詞に。大ねもさやうにをいはぞこゝ。とするをうけていつるし。　注まろし

事 萩の葉をしこえ 四十七のひら 今は抽徳の絵にし。萩などせしるそこへ
あらし形るべし。
よづりぬおこたり 四十八のひら 宇治におき給ひしまし。
はんはさるものにてこえ 四十九のひら はんは中君のはん。人とは女房ぞと形り。
さるまぢ此すは。細流の説のごとし。
やむこと形きもの姫君のこえ 日 ことは結婚がんに。深無ると思ひて
らべとるす後いたんとて。いひ出て。さて下は。君の君のすれ下がまへし。
かぎりなしは君の君形どこえ 五十はおら 此うぎり所とはは。住のごとくにはあらで。
と此事とぞと。又親王は姫君形とは。銀の文づりへ人のごとくにはあらで。
といふやうにも此事あるし。さべて限なるといふには。上へ限あると。下へ限なると。

二つなるをこゝは。住のそこは。上へ限あるし。今いふこゝは。下へ限あるし。
そこもむつましくこえ 五十三のひら そこはそこもくといふに同じ。さべてこ
むつましく思ふべきなれも形き人は。恥べきこと形とぞと。其は人のやうを
ん結るに。むつましかるべきなれ形き人は。かりてさぢ結らぬは。何すもさ
やう形る抽にやと。まづいひしく。今兵がみづから。蓋ふにむつましかる
べきなれなれとぞと。さぢざしていつへをかはよしはのべるし。
かぞりおも形くこえ 日 かぞりおも形く生れつきたる身にお恵をぞ
して。抽を恥んもかたいらいらく思ひ結るなれ。生れつきたるまくに。
おも形くはいつへをバ中はしといふし。みづから。かぞりおもなくと
いふは。さとさらにおと形き者になしていふし。

宰さやかなるおきなごと　五十四のけら　一説に黒の字はすこしといつるよろ
し。上のをこなへしこゝは字はすこし。此字は誤。あまり殺えきよりと
いふも。宰さやかなるハこゝハ俗言に口ぎたうなるといふがなし。
おれかるは其べのはかしらをこそ　日　結に家一人ならどとかしゝやさんとやはに
ハあらじ。ようじなべて大方はうへをやせるにこそはしといふも。さかし
らとハさかしぶちて。物といひあつかふをいふ。其べのとハ女郎宮につきてい
へこと。
見れてもかのは物ならぬ　日　上に　かは兵が何に。むつましく思ふべきゆゑ
なきへき。中にならぬなど。物ならぬなるべ。さてこそ
物をなづるハ恥べきなのなるゆゑなれど。今女房ならぬ。物ならぬしてかく

も結ぶ事。私にきてならぬ結ぶなある時節なるんとも。かのといひを
見といつるに。人を法べし。かのとハ兵がいひしことをうきていひ。をりとハ。
今此時をさしていふも。かならず恥なふなある時節なるべきに。家かくてゐ
家ハ。人なきまゝ。そこ時て。遊し系らせんとも。かくのゝ事ふ。恥なふなど
きなとハかくらふ男などの来るに。ふをんとて。なるべ。業ふに
をかまて。え毎らぬるすにりなして。そこなを結んとのゝ事ふも。
おしなべてかくのゝりこゝ　五十五のけら　兵が物ならぬもをば。人にのこそ
なく。何なりしいつへをしるべ。業ふの人に。おし。なべて此女房ハ。みな
かく結ごとし。かとなきなるんと。思ひなふこそ人うれも。
なりかなやし結ぶやこゝ　日　まづ男に女のなれいひきりなることハうち

まかせてハ恥てせぬこと也。万葉集に奈乃了須までハ。夫とよむ男をさで
も女の夫のわかせざる成り。女の子が名を。男にいひきかせたるハ。即ち契りを
ゆるすになりし也。此物語のころなどハ。さまでハいましめざりしかども。
経文の仏道へのこゝろにて。男に女の名をきかせたるハ。よづハ恥べきことにて
ありし也。今債事は。申ねが名をかせしハ白文を免れまして。ふやすくせ
ざるなれバ。董氏は。白文のさきに。くちをしくおぼさるゝ也。

此御ゆかりにも　曰　或妙に。白文と好色のすにつきてハ。称ときるすのを
としといへるよろし。　侍従。女一夫の方が女をいふハとがなり。

じんすきむつびにわかゆく太夫のおもかげ　李云北部　太夫のおもかげハ即ちじ
んすきむつびよりわかゆくすれ太夫のおもかげし。じんすきむつびとハ好色
のうちむつびし。

称とましがたに　曰　女一夫のまじはりにもちてとなるハよろし。まことハ浮し。

ふるべきこのうゑや絶るべき　曰　ことを女一夫又白夫おもむきすにかゝはりてい
つる説をみるに憚し。もし絶るバ。似すふべきこのかくやおちそべきとて
いふべからず。絶るべきとハいでそでうちん。されども。董氏の。遊仙窟は洞を
のうちつらぬきて。文ほど書は洞まで。営へるのさまにて。諸人そい
つる洞し。称と称ときましがたしとのうたへぞ。崔季珪がやうな
家兄ハ絶るべきかハといふ也。次る董氏の洞を。此営へにまかせて。文をの對（ツイ）
の語をもちてのうたへるし。

あだしもの　ゑて　ゑく　　六十九部　あだしもの
なけとみてしまにとそ経ぬ月はうちの

かくはじめ思ふにもまされ。よくよくみて なほぞきこゆるはなれ
しるや思ひなしてむ。
今それ神宮はさなし給へるに 上五十三のひら ことは法に奉る人のさまを。女房は
ぞの思ひつるになるべきといへるなれば。白衣の法さまを。女房たちのかく思ふるし。
搔きの説。中々にむづかし。
大和の国をさしていふとも 日 白衣の法すがた。往々にみえなれても。といへる
にもうべき。これをさやうにへくちはいふ也。書にも搔きは謂也。
手習帖
むかしおかしければ 五のひら 烏帽子は。上ざまへおし上ぐる。額乃さ
すはいつもて。いやしき輩也。書は烏帽子の織き毛も。烏帽子なくるあり。

まゐり物乃おろしとて 日 食物にんをつまみて。はむすかたそむかいたれねること
いふがおろし。法なかり。
ことばをとくなかれとはいへと 八のひら いへる。上のくその結びをて。ひつき
のこと。ことハ。そのことも。いへどもさいふ事はうたがはし。
くるしと思ひなへし 十一のひら あるしハ。あひしを謂ゆる成べし。
法き志を見やうじくる 十二のひら 搔き云。着(ツキ)染領(レミリヤウ)じける也。
法きくる人物をうなき 十五のひら 孟浪よろし。
ものこはたしかにしぬさしあつしなかりとて 日 法師よ。身をなぎんとて。
いづつまうはさ事を。浮世にはまうにそむきて。こてふあらそ。
此人の思ひつづくるんに。くるしくいへる。いそがはしうきまどふなし。

ぢやふきうちすれど　十七のひら　どハ、ぞの俣也。
前身をなげしうて　廿六のひら　二三の句ハかすしさのせち形りしまた也。
おすじん形る人もうて　同　上文、おやいかにといふより、いかでかしらせと
いふまでハ、浮舟君のんを、しらぶいつる文、おすじんなるといふより、地よりいふ
文なるに、その君に、堺なりていかど。
おすじくうえ形どうて　廿三のひら　同まれ人者の同じくハ、あらも、此小世
の里へ立よらんと、しらふ所に、そもに妨ぎらまて、え立より給ふ所を、
今日ハ、その志しふ人をもぶきまて、立より給るとも。注しがつり、そ
ぶきまて出立るにをいらば。
うちくもまがえ形　廿六のひら　しらぶよのつゆ形女の髪のすも、此所ハ、尼の

みをくて、よのつゆ形髪形るハ、そづらしきなにまほてかくいつるも。
何にかかふらんと　廿六のひら　こまハ引前形上句のまばかり也、下句形まハ
ならぬ。
人の抽いひをさまがふうて　同　人の抽いひとハ、少将尼が何に、そしおぼしぬ人
を知なり給ひてといつるアヽも。おぼし日がむるとハ、吹ゑさぬして、くちしく
らふをいふ。こまも中将の口ぎさひしる前形何によりていつるのゝ也、その
まゝ見りていふにハいらば。さてかくいつるまハ、此中将、尼君のむすめにおく
まして後、北方をもさぐ見ぬ。常をまれがらく志のひながら、さまがふ
浮舟君をもて、心をかきて、日が中せるすれば、吹ゑさぬ。こまらにとひのふ
てそおりしかまて、見づるも。注いか形るまふに、吹ゑりがらし。

うつりくうち出てぞ見し　廿七のうた　はなといふより　うつりといふまでハ。
浮舟の古歌を、兄君の思ひなりて。うち出てぞといふハ、地の詞なれバ、うつく
しくの下のく。ハ。ヒを濁るべし。然らざれバ、文字のみぞ。
うちつけに出でて見し　廿八のうた　今まで何の縁もなくて、ふと出合た
じ、て浮舟を、うちつけに心をかけて、来らん事もといふ也。
おもしろ　曰　異事也。
高ければ逃れ見し　廿九のうた　見べきゆかしきハ、他の字を出て、他出他
人などいふを消ひて、ゆかしきハ、他所の野といふこと也。まして此方
ふる事へ来る事ハ気能はぬ他人なり　恐ばしく思ふ也。
高瀬川出るしき　卅のうた　兄公の、ますらちの山のといふを、語とるに
里なくて宇治川出ましきハよみたる也。荻原といへるも古歌によれり
ぞ猶行りがずに常自。猶よく考ぬべし。
中くらつかし　卅二のうた　古歌に思ひうき世の人ぬ山路とハあれ
ども、此山里に来りバ思ひ出らるゝ也て、中くらつかし也。そ見も今又を
じ我つ何里をおふき人わらぐ。殊ぐるむべきを、きる人もなぐさげなれバ、此
里を思ひうき世にしぬ命とハ、え思ひ出らし。佛ら渡といひて、浮舟君の
つまあきをかこつ也。
宇治乃あなたに　卅三のうた　三の句ハ、ながめてふるらん也。里の枝名とハ、月
影のさし入ル縁乃詞也て、浮舟君にちかづくるを、ゆるるにとくへるる也。
いかりうちに　曰　此歌の詞、心得がたし。これハいかりうちにてかぐる人

いまでこそかはらぬものとなる事を。信長なるべし。いはゆるふるき時まで
とハ。此世の里ハ。いはゆる里なれバといふ事也。それゆゑわがもんの下にぞなど
も落るなるべし。
あけぼのちかくなりけれ　此句の心　笛ハあけぼの。ちかく。なりけり。
くまなし。笛をあらはし信長なるべし。それを。笛の唱歌に。あけぼのちかくなりけれ
などいふ詞ハ。まづべくもおかしきぞ。
前 またうち続ぬれ　月　二の句。ならし。此句のすゑを思ひといふことゝ聞えけれ
ども。それハ詞なれど。されバあるもハ。あくまのまゝにて大尼公の琴にもといふ
をかしき。それも。ふるきを。ことのといふハいづれに聞えけり。
前 山里のたく　早の歌　すべて中将乃みだれかゝるのすゑ。家を。拙思ふ

身なれバ。今此山里へ来て。秋の夜涼き月を聴き思ひあかぬとぞ。
さて浮舟君も。物思ひなる身ときゝをバ。おのづから家とはんもかよふべ
きものぞと。次の詞をいふ。次に此君を。浮舟君の事とせるハ。ひが事。
さてハ次のおのづから家の詞をもかなハず。次なる所ハ中将の家と
はんも迷ふべしといふにより。拙き人と人の未だしの事とよく見るもおもひ
まぜずらんぞ。
前 いもが衣しやふかりてたく　早土乃歌　此古物語なども見るなるべし。
前 ころもやしのあやなきすに作る例を拾き出してる。
おやすみ一夜びたく　早百の歌　こゝより浮舟君の心をなぐさめに入る
法のふいつかへつるひしけれや。といふより下ハ。地よりいふ法と聞え

て、その場なきハいかゞ。

猶みがゝらいといふ事とも見給ふ　平十七歳　上にたゞつかしくおとなるべき

人さへなり給ぬ、といふにつかりてゐるべし。まべて此物語ハ、かやう

のとゝ給ひし、心を法華でハ、ゑいなし。

法ゝきたゝ心を給ぬ　平十二の歳　此下に云ゝとて、といふ語乃至しが、前なる

ゐるべし。本はまゝにてハ、文とゝのたぞ。

ふたしくもそのほどはなるをバいひさしつ　平四乃歳　くたしくも此下、もしハ

なるをバの下に、詞おちゝるなるべし。

かく明りにゝれば恨を侍る明り　日　此詞心はぞ、紫式部、とりたづしの語

なるべし。もし侍、笑ゝる明らバ、恨を侍るとゝ笑侍し、明どこそ為べ是。

いとたづかしく明しおぼし事る　平十五歳　たゞ明き物りおぼしとりて

家も、おと和り明る此身をやと、僧都のいつるを、たづかしくおぼすも、おと

ゝり明る身とハ、宇治にて、尺つをしる時のさ夜を思ひて、世間たゞ明き物にお

ぼしとりてるも、おとゝりゝ思ふ也。さて深夜ハ、其時の家身のさ夜ハ、たづ

かしくおぼすも。　注記がこと也。

山伏をかし家日にぞ云ゝ　日　山伏を、山りしをむ家に、今日時やうに、ふく風

の音時、いと心ぼそき時ぞ。猶を明るゝといへるも、山りしを夜ぬ人を、山中

の風の心ぼそきなるをバ、しらざる時、山ぶしハといふてにをハも。注とがへ

是、山ぶしたのたりじ。日にぞのぞもじにゝ明らぬ。もし注のまゝ明らバ、

山ぶしをしらぶぞとてそ為べ是。

あくちよぎ所る人をいふ　五十七ぬひら　湖月師説よろし。浮舟ゑのうち志
見りさるに對へて。あくちよげ所る人とハいふるし。
よの法ゆれ　さるにそいふ　五十九のひら　浮舟ゑのいまだ尼に所らで。よの法
孫乃さ面にてあし。猶ハ。中將に對面しあふことハ。おぼしたゞかるす
もありつゝ見ども。今ハ尼に所り給ふる身なれば。憚置給ふこともあるま
じ々結ば。心やすくかたらひ申さんとし。
あ　おぼかた乃いふ　六十ぬひら　家をいとひて。ゆきかくらば。とゞ大かた此世
をいとひて。尼にハ所り給ふるなれども。何とかや。家をいとひてのやうに。
思ひよせられて。家をつくてそおぼゆることし。
あ　雪姫かきいふ　六十一のひら　雪深きといふに。若とも所らぬ身といふ

意ハ見るべし。さて家ハうき身所ゆるゞと。今よりハ尼ゑのと見えり
てそ。年をつゝて。ながらふべ見てとし。
いもうせ所るべし　六十二のひら　大尼ゑのむすめ。尼ゑの妹なるんか。えま
ちつ年給ふまじき所どいつるも。大尼のむすめのやうに呼ゆるし。
なほ口おもはこちして　六十八のひら　猶のことハ。何なるとより語るをきく
ながらも。こ所とよりハ。猶いひ出がらはよしし。
うつし人になりていふ　六十九乃ひら　浮舟ゑ此なるし。此人を。既にうせぬ
家ものに思ハ見てあし。猶世に在て。今より後。又人にも志られて。よ
のつゆ此人になりてといふことし。末の世とハ。浮舟ゑの現人（ウツシヒト）になりて。
後のすをいふし。業所る家此ほとりとハ。さでにうせぬるものに思ひしる人

なほバ。又對面するハ。黄泉ハ。ごとく暗なるに。かくいひすし給ふし。末の世
といひ。黄暗る泉といふ。上文に。やがてうせにし人と思ひすしてをや
こ暗んと。ひらふにひらかりて見るべし。注どもも皆いうしきむがてとも。但
し花合に。伊勢冊等ハ。よみ川玉に入まつる。陽神のとふらひ給
へるすゑしより。そまいを黄泉の泉のすゑにより。せ付るしと。ひらハ。黄暗る
泉とひらふに。よしまておぼゆ。

おのづからかくらひたる云し　日　おのづから風のまぎれに。そぶらぬすゑどハ。
ひかりもまべ見ほど。又泉ハ掬りハせしとし。

いとたづかしぎに　七十ハ知り　黄泉のさゑし白玄のすゑ中に出るを。たづかしげ
なてゆゑ給ふし。

ゆくんかて暗りきるほんのあどかなと　日　白玄の深泉ふに無ひまひしす
なり。白玄ハ。中玄のみづからハ。ほかのことなほバ。此すハ。黄泉に對して
ゑ。中にべきやうを暗き。きしからぬほんとのる事ふし。　ただ白玄乃ま
きぎ記しきすし。とのるひらる注ハ。いとおろそかし。

うきすす。ゆつきくらむてそ　七十一のひらもし深泉ふり。無ふ人をこ
と暗どを。ゆ法事くらバとし。

## 夏浮橋歌

歌名夏浮橋のすゑ。河海に引きる。歌中ハ夏ハ日ちり。ハうき橋り
うち浸しつゝ物をてそ思へ。こまハ名取し。夏ハことにハひらぬ。万葉三
の歌に。ゆきハ。ゆきハ。ゆさにハわらじ夏ハ日ぐ瀬とハ暗らぎて渕にあまや

も。又世の事に芳野ノ作とて。夏はすゞ言ふし有名とうつくにもみてこ
し物を思ひし是ぞ。此夏はすゞ吉野川の月乃名所し懐風藻
に吉田連宜従駕吉野宮詩に今日夢淵々遺響千年
流とある。下は淵字ハ写誤にて。こゝもかの夏のすゞを詩なる
なに夢淵とハ作れるし。こゝもかの詩をもてみれバ。まし詩よ
き所にて。人の遊説をしそ所にて。かの夏のすゞ所うき橋と
よ名ハ此夏はすゞを。夏の後里そもいひて。そこにすゝせりし橋な
ゑべし。さてかの夏は二三の旬ハ。こゞうち後しといたん料の譬のこと
ましより。そハいかにも何れ。夏はすゝハ。右乃名所にて。夏はすゝハさらに
なきを。其は中ハとあるにつきて。業式部を。夏はすゝと。此詩俱れる也。

たゝまとさらに夏はすゝにとり物をるか。いづれにまれ此事は此名につき
しるハ。こゞ夏のこと。落雲堂にも。夏は後里乃うきたしかとのこう
ちなぞ筆かれてといひ。狭衣物語にも。たゞ物しや夏はすゝ所うき
たし。御粗笠ん乃しゐえもたてぬよとよめる物ども。夏はすゝし。けて
此事の名を。ゆるきおぼしにもいた絶しるごとし。此物語の事べて
にもまゝるべきなし。但しうちまかせて。まべらの名といはむ事。
がふぞし。こゞ作りぬし。此下はんまぞ。まことばへをふく名と
ゑべき。そもし此物語を。まさしく其にまし事はだと出られ
ども。みな後にかりものがたりにて。光源氏ゑといひし人をたゞ
名。何もしまとゞく。夏にしゑしまはぶく物を。

にもてなる世をはかなむやうよ。まことふのこゝろおもはくてえたる
ことさらに其身のなくならざる事なる。さて志ゝ此物語をよべて其身乃
むなしといふ事ハいかにのまなべきことぞかし。それハ物語おもひとりハ。
例の文ぶくろ佛ぶつなどと。又ものかたり荘周が云ねごとを引
出て。此世乃えわく夢なきこと。夢ねごとく物がたりを示
きりといひすさまれども。なる文をみなかうぶ。これハいはゞ此物語に
出る事どもをみな夢なりといふ文をみそて。いふ。物語中の事の夢ぞ
ときしへるにをかうがるをや。此事ぢやん。よく其ぞハうひまでの
へなべし。

らうけ　二のまき　夢見の事なるし。後の世にも夢といふことがより出たり。

くるまどのふかきうちきんうく　六のまき　玉鬘ハ。日本紀略に。萬壽二
年三月廿五日。皇后宮娍子崩ス。四月十四日。皇后宮ヲ葬ル。斂玉殿ニ
又九月廿四日。前皇后娍子ヲ改葬レとあるによる。葬リのよしにぞ
らく斂ム所ヲ玉殿ニ。殯宮のよし。さてこゝにいへる事ハ。此物語にあ
もしバ後の世に傳ハる事物語ありしるべし。後にまぎれぬる事ど
もハみなかうぶるなり。
なげかしハ。かゝしむべきよ。　日　まことむべきよりひとつ孫ど八次の毋へ乃
かたる詞に。なげかしハいふかくなきてといふへうなり。
なまとかしふかわるなど。　八のまき　おとさらにおなじえうくてのにふ
詞也。

ぬきぼし　十一のひら　結出かむかぶせし。

ことハ何ぞすぞ　十三のひら　僧頼ハ。昨夜やがて小君を小屋へ法かけしつ
らんと思ひて。夜ひ。小君やまうで給ひしと出るに。小屋にハいま
ざ小君ハ来ぬ所に。夜のうちうえがうして。ことハ何ぞすぞとおやしむ
なり。さていかなるすかハ出し孫ども。大将殿の御使まてとおるに。おどろ
きとるなり。

ことてそハさハしかしかなるべし　同　まきに僧頼より夜わりつもどと。
何すそもさざかなるべ。心頼がさかわし。此度の夜出そ。しかしかなる
すハいひおとせ給ひつるんと思ふし。されどさにも使の来しに。又
しも来るハいかゞとのことて。おやしかしゞハいつり。侍ほり

ことを。薫の夜なるんとし。とおるハしがつり。ひより僧頼の御をうそこ
まてとおもバ。僧頼より。しかしかなるすれをうそこ。なるんと思ひし。

おとゞ　十四のひら　河海ゟ。悉とおるよろし。みづから来りて。
おとゞ〳〵つぶさにハ中きんのことし。毎事ハおろうぞ。

ろ給づよくおもし御をことぞと　十七のひら　ぞもじいかゞ。衍なるべし。
一本にも。おりしまれぞ給ど。とおもども。そもしもよろし。

僧頼ゟ思ひゆるして　十八のひら　僧ヨに僧頼に見んじてといふことし。

家頼がらもどかしきに頼ん　同　さ夜ぐ家ゟそむきし人をかくま
で思ふことハ。家頼がらも。家心のもどかしく思ひしを。まして人めにハとし。

雲のたるかに云く　十九のひら　のすじ穏ならば。雲ゐを保まるなるべし。花

○むかしをうし　九

○五十九終

本居翁著述製本所

書林

勢州松阪日野町

文海堂　柏屋兵助

持主山形縣北村山郡正厳村

高橋慶三郎茂隆